

「オール伝統」で観光立県

平城遷都から1300年を迎えた古都・奈良では、観光都市としての復権を賭けたイベントが幕を開けた。目玉は約130haもの面積を有する平城宮跡（奈良市）に姿を現した「第一次大極殿」だ。基壇を含めて高さが約27mにもなるこの建物は、文化庁が約180億円をかけ、2001年から復元を進めてきた豪華絢爛な古代の宮殿だ。



● 都道府県別ランキングに見る「伝統生かせぬ奈良」

	国宝の建造物数……1位(64件) <small>(10年5月1日時点)</small>
	延べ宿泊者数……47位(約109万人) <small>(09年の速報値)</small>
	客室数……47位(約1万室) <small>(08年度末時点)</small>

注：国宝数は文化庁、宿泊者数は観光庁、客室数は厚生労働省の資料を基に本誌が作成



柱の高さは約5m、天井高は約10mだ。ヒノキの柱を始めとして約2400㎡の国産材を使った。柱の半数が奈良県産だ。内部には、高御座（たかみくら）と呼ばれる天皇の玉座（写真中央）などを展示した。施工者は竹中工務店・浅沼組・森本組JVだ（写真：44ページとも本誌）

平城宮跡で復元された第一次大極殿を目玉に、4月24日に開幕したのが平城遷都1300年祭（以下、1300年祭）だ。仏像に鹿の角をつけたようなキャラクター「せんとくん」で知名度を上げた。会期は約半年後の11月7日までだ。1300年祭に合わせて奈良県の有名な神社仏閣が秘宝や秘仏を巡り、滞在するよう仕掛ける。

東大寺、法隆寺、唐招提寺、薬師寺——奈良県は伝統建築の宝庫だ。同市の寺社や平城宮跡は1998年にユネスコの世界文化遺産として登録された。国宝の建造物数は京都などを

抑えて堂々の全国1位。にもかかわらず、宿泊者数は全国最下位だ。「修学旅行といえば奈良」のイメージは、いつしか過去のものとなっていた。

同県は08年に3579万人だった観光客を12年までに4000万人に増やす目標を掲げる。外国人観光客は54万人から100万人に増やす。宿泊者数とともに全国最下位なのが客室数。ホテル誘致にも力を入れる方針だ。伝統建築や歴史を全面に押し出す1300年祭は、「観光立県」の起爆剤としての期待を背負う。

1300年祭の象徴とも言える第一次大極殿は、710年に藤原京から平城京

に遷都した際に建てられた宮殿を復元したもの。復元設計は奈良文化財研究所が手掛けた。同研究所建造物研究室の島田敏男室長によると、発掘調査で見つかったのは基壇の跡と瓦のみ。調査・研究の成果から、奈良時代の様式や技術を基に仕様を推定した。当時の様式では横架材が細く、水平力に弱い。木造部分を厳正に復元する事業方針に従い、耐震補強ではなく基壇部に免震装置を設置している（詳細は49ページを参照）。

「バビリオン型」はもう古い

「2009年開催の横浜の「開国博Y150」



会場整備プロデューサーに聞く

ガイドツアーで歴史の魅力をストレートに伝える

最近の歴史ブームの特徴は、お宝を単体で見るのではなく、「巡る」ことで物語を紡ぎ、自らの知的好奇心を満たす点にある。ところが、これまで奈良は京都観光のついでという扱い。観光客は東大寺や法隆寺を見てすぐに帰る。これほど文化財が多いのに、生かされていない。

平城宮跡会場では、歴史の深みや物語を来場者に伝えるために、ガイドの育成に力を入れた。シナリオは専門家に任せ、ガイドは内容を覚えてから、自分なりにアレンジしてもらい手順を踏んだ。ガイドをしている方の中には、歴史好きで、自分の知識や興味があることを話す人がいる。しかし、ガイドとは本来、その場所が何が起こったのかを分かりやすく、楽しく、共感を持って伝えるものだ。来場者が尋ねたことや、知りたいと考えることに、きちんと応えられる人材を育てようと試みた。

会場に何も無いときには、距離感が分からなかったが、第一次大極殿が建つとイメージが湧きやすくなった。我々が設計した修景柵で前庭を囲うと、さらに空間の意味合いが強調された。ユネスコは第一次大極殿の復元には反対で、遺跡のまま紹介することを考える、というスタンスのようだが、一般の人にとってはモノが見えた方がわかりやすい面がある。いずれは、携帯端末を通して宮跡を見ると遺構の写真やCGで再現した3Dの

画像が見えるような仕組みにすればいいのではないかと。

相乗効果でイベントを盛り上げる

予算をかせずにイベントを盛り上げる方法として、次のような面白い例がある。神奈川県平塚市で、宮沢賢治をテーマに美術展をやり、図書館が宮沢賢治の本を集めた。プラネタリウムでは「銀河鉄道の夜」と題した宮沢賢治の世界観を伝える映像を上映し、商店街には本やグッズを置く。それぞれが持つわずかな予算を、ある期間に1つに集約すれば、町中が宮沢賢治一色になり、すごく大きなイベントをやっているように見える。奈良でも同じように、1300年祭と時を同じくして、秘仏や秘宝の特別開帳などを実施している。これに合わせて鉄道会社や旅行会社がツアーやキャンペーンを組んでくれば、相乗効果で県内に観光客を呼びこむことができる。(談)

杉本 洋文

(すぎもとひろふみ)
東海大学教授、計画・環境建築代表。平城遷都1300年祭では会場整備プロデューサーを務める



では都市自体がすごく魅力的なのに仮設会場をつくってしまった。だから、入場料を払って会場に入ると、すごくみずばらしく感じた。1300年祭も同じような博覧会だと思われているかもしれないが、そうではない。こう力を込めるのは、平城宮跡の会場整備プロデューサーを務めた計画・環境建築代表の杉本洋文氏だ。

開国博Y150といえ、500万人と予想していた有料入場者が約124万人に留まり赤字が発生したため、訴訟も起きた。当時の中田宏横浜市長や野田由美子副市長が突如辞任するなどして、批判を浴びたイベントだ。建築設計者の杉本氏が最も力を入れたと語るのが、475人のガイドによるツアーだ。「地下遺構はあるけれど、地上は普通の原っぱにしか見え

ない。見えないものを、どうやって来場者の頭の中に浮かび上がらせるかが課題だった」(杉本氏) 奈良県では07年の知事の交代に伴い、予算を約300億円から約100億円に圧縮した。これに伴い「パビリオン型」から、国が整備した第一次大極殿を活用し、平城宮の遺構そのもの

にスポットを当てるイベントに転換した経緯がある。これに併せて、会場の建物も大幅に「軽量化」し、あくまで脇役に徹した。設計を担当した計画・環境建築によると、もともと地下遺構を傷つけないために杭は打わず、重い施設もつけれない。このため重量が小さい木造やリースのテントなどで、来場者が宮跡を巡る

ための拠点となる施設を分散的に配置するにとどめた。平城遷都1300年記念事業協会によると、会場へは年間250万人の来場者を見込んでいる。4月29日から5月9日の入場者数は31万9000人と、予想していた21万人を大きく上回った。第一次大極殿への入場者は15万8000人に達し、順調な滑り出しと言える。

休暇取得の分散化の検討が始まるなど、国は観光を成長分野と捉えて力を入れる。国土交通省の成長戦略会議では、ICTを活用した観光の高度化や、観光地づくりのための規制緩和、人材育成などを提言している。こうした流れを追い風に、奈良は復権を果たせるか。1300年祭の成否は、今後を占う試金石となりそうだ。

技術継承をテーマに据えた第一次大極殿

第一次大極殿復元のテーマの一つが、伝統技術の継承だった。柱の箱鉋仕上げからは、宮大工の手仕事の成果が伺える。

「復元は最高の教材だった。ベテランのサポートの下、育ててきた若い大工が中心となって取り組んだ」

感慨深げに語るのは木工事を担当した瀧川寺社建築（奈良県桜井市）の瀧川昭雄会長だ。同氏は奈良県文化財保存課で腕を振るい、後に独立した宮大工の棟梁。室生寺御影堂や東大寺大仏殿など、数々の有名社寺の修理のほか、平城宮跡の朱雀門の

復元も手掛けた。

一方で瀧川氏は「日本ではもう、こうした復元に使える材は手に入らないのではないか」との懸念も口にする。今回はすべて国産材を用いたものの、巨大な伝統建築に見合う材の調達は、1997年に復元した朱雀門の頃よりも困難になっているという。

瓦や金物も伝統技法で製作

伝統技術は木工事以外にも用いられている。例えば屋根工事では、遺構から出土した黒っぽい色の瓦を再現するために、1枚1枚を手作業で調

整した後、約1000℃で2日間をかけて焼成した。

木口金物には「水銀アマルガム鍍金」と呼ばれる技法を用いた。水銀の中に純金を細かく刻んで入れて溶かし、それを金物の表面に塗る。これを焼成すると、水銀が飛び、残った金が金物に融着する。

土壁を塗るのには2年をかけた。奈良時代には竹小舞がなかったため、木小舞を用いた。ノミで切り込みを入れて割った材を使い、壁土は工事現場に設けた土練り場でつくった。

彩色工事では、研究成果に基づき

(写真：48ページともに文部科学省)



柱の仕口を加工する様子。樹齢約250年の国産のヒノキなどを用いた



尾垂木を設置する様子。木の特性を生かして施工精度を確保した



高さが2mほどもある青銅製の鸚尾（しび）を設置した



合計10万枚の瓦を要する第一次大極殿を覆う屋根

色を選定。建物の印象的な朱色は、丹土と呼ばれる顔料を使っている。

建築基準法上は「屋外展示物」に

現場の管理を担当したのは、文部科学省大臣官房文教施設企画部の松田賢係長だ。「復元工事の現場に来るまでは、大学施設の設計や施工管理をしていたので、当初は伝統建築に関してまったくの素人だった。参加した職人の意気込みで圧倒される日々だった」と振り返る。

伝統技術をふんだんに用いた一方で、建築基準法への適合も求められ

た。松田氏は「見た目はまるで文化財だが、建築基準法第3条の適用除外の対象ではないため、一般の建築物と同じ扱いになる」と説明する。

内部に展示物を配置し、見学できるようにしているものの、用途は「屋外展示物」だ。建築確認を担当した奈良市建築指導課が、中で会議や催し物を開かないならば、用途変更の必要はないと判断した。ただし、内部には煙感知器と炎感知器、外部には消火栓を設けている。

こうして、第一次大極殿は9年の歳月をかけて完成・公開に至った。



瀧川寺社建築会長

瀧川昭雄氏(たきかわ あきお)

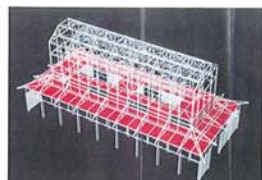
第一次大極殿の木工事を指揮した瀧川寺社建築会長の瀧川昭雄氏は、モンゴル人民共和国ラマ教寺院の復旧工事の技術指導に赴くなど、海外のプロジェクトにも数多く携わってきた宮大工の棟梁。第2回ものづくり日本大賞を受賞した(写真：本誌)

伝統を追究するために採用した免震構造

1997年に復元した平城宮跡内の朱雀門では、建築基準法に適合するために、耐震壁や筋交いなどで補強した。第一次大極殿では、より純粋な伝統建築を目指した。耐震要素は厚み25cmの土壁のみ。屋根に一体化のための補強を施した以外に、上部構造にはほとんど現代の技術を用いていない。その代わりに、基礎には免震装置を組み込んだ。

採用した3つの免震装置によって構造評定を取った。まず、滑り機構としてリ

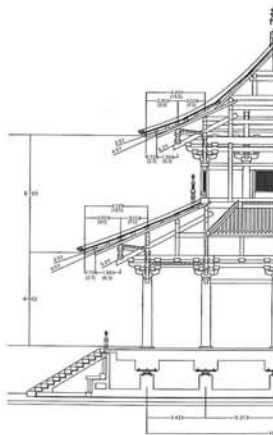
ニアスライダーが44基。通常ならばさらに集約することも可能だが、遺構の上に建っているために掘削ができず、地盤には平均的に力をかけなければならなかった。次に、復元機構として使った積層ゴムが6基。そして、初期の振動を減衰させる粘性ダンパーが4基だ。建物が3000トンと軽いため、積層ゴムでは効果が出ない。そこで、リニアスライダーを用い、動いた後に元の位置に戻す機構として積層ゴムを使った。



屋根を固めるために、一部で筋交いや構造用合板などによる補強を施した



基礎の内部にはリニアスライダーなどの免震装置を設置した



第一次大極殿断面図